

2024年11月7日 第161回運輸政策コロキウム

「ドローン配送の利用意向と効果」

屋井所長 閉会挨拶

本日は、ご来場の方・オンライン参加の方を含めて、大いに活発な議論が出来、極めて有意義な勉強の機会になったと思います。野波先生有難うござります。

今日見ていただいたように、我々の研究所で行っているドローンの利用意向、ある意味では需要分析はまだ始まったばかりです。安部研究員は当研究所の研究員を経て、大学の准教授として学生とともに研究を進めている。その中でこのようなテーマ設定で研究を進めてくれています。

野波先生から、日本の中でドローンがなかなか進展していかない。他国と比べて遅れているというところの核心といいますか、問題点を力強くまた明確にご指摘も頂きました。この研究所は運輸と観光もやっていますが、各分野に新しい技術が入り、新しいシステムを導入していくという沢山の可能性があるが、どの分野でもなかなか進まないとか、日本の場合は離島もあれば、中山間地もあるし、地方部もあって、そういったところの公共交通をはじめ、様々な問題がありながら、なかなか抜本的に進まない。こういった課題が山積しているところではありますが、それに加えて、ドローンの課題についても色々な面で共通点もあり、どうやってこれを進めていくかというところが、改めて深く理解が出来たところであります。

何点かあるわけですが、特に一つは、これは安部先生の研究としてもどんどん進めていかなければいけないところではあります、社会的受容性とか色々出てきました。利用者が利用してくれないと成り立たないという意味では、それをビジネスにしないといけないというところではあります。多くの課題はコストが多く掛かっているというところもあります。そのコストを多くかけている理由の中には様々な要因がありますが、社会があるレベルの安全性を受け入

れて、その中でもやってみよう、やっていこうという姿や、地域の理解として、地域がそれでも良いのではないかと言ってくれれば、それから始めるという方法もある。一方で、法律や制度をしっかりと全部作り上げない限りは、なかなかスタートできないというのもあると思います。今日の議論の様な新しい技術については、地域で受け入れてくれる環境を作るためのソフトの技術も必要になりますが、ここも日本は明らかに遅れています。そういったところも一緒に考えていって、どうやって完全ではない技術であっても、どういう条件で受け入れていけるか、何か問題が起こった時にすぐ止めてやめてしまうのではなく、それでも想定内だという事で続けていけるような社会にしていかなければいけない。そのためには、いかに早い段階から地域を巻き込んで、理解をしてもらう環境を作るかとか、そういう努力をするかとか、それは事業者だけが出来ることではないので、そういうことを地域としてしっかりと進めていけるような体制づくりが改めて重要なと思ったところです。

我々の研究所では、タクシーやバス等に係る自動運転化の調査研究や、そういったものも含めて新しいテクノロジーを地域で受け入れてもらえるかという勉強会も始めていますので、今後も様々な場面で、野波先生のお知恵やお話を伺いすることもあるかと思います。ぜひこれを機によろしくお願ひしたいと思います。

ご参加の皆様、最後までお聞きいただき、どうもありがとうございました。研究のレベルとしては、まだ始まったばかりというところではありましたが、議論としては十分にできましたし、今日の議論も踏まえて、研究としても進めていきたいと思いますので、今後もコロキウム、研究報告会等にご参加いただければ大変ありがとうございます。これで最後のあいさつに代えさせていただきます。長い時間有難うございました。また引き続きよろしくお願ひいたします。

(以上)